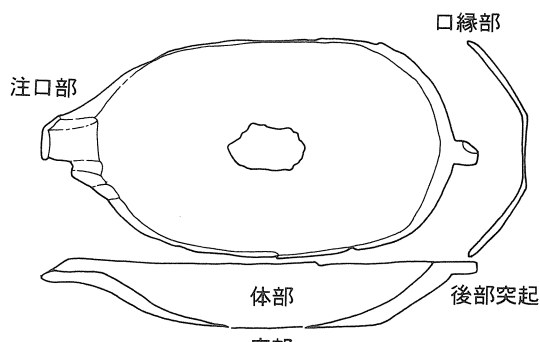


第3節 木製片口について

はじめに

静岡県における弥生時代～古墳時代の木製品研究は、学史的にも有名な山木遺跡の調査以降、資料の蓄積もあまり見られず、やや停滞気味の印象が強い。それは、遺物の性質上、出土例が低湿地（流路など）に限られるため、必然的に共伴関係の把握が容易でなく、層位論に基づく新旧関係の把握や様式論的な形式、型式の組成、出現、消長を検討することが困難なことにも起因する。

中手乱遺跡では木製片口が出土したが、ここでその意義・評価を明らかにすることを目的として、弥生時代～古墳時代の木製片口に関する若干の検討を行う。



第90図 片口の部分名称

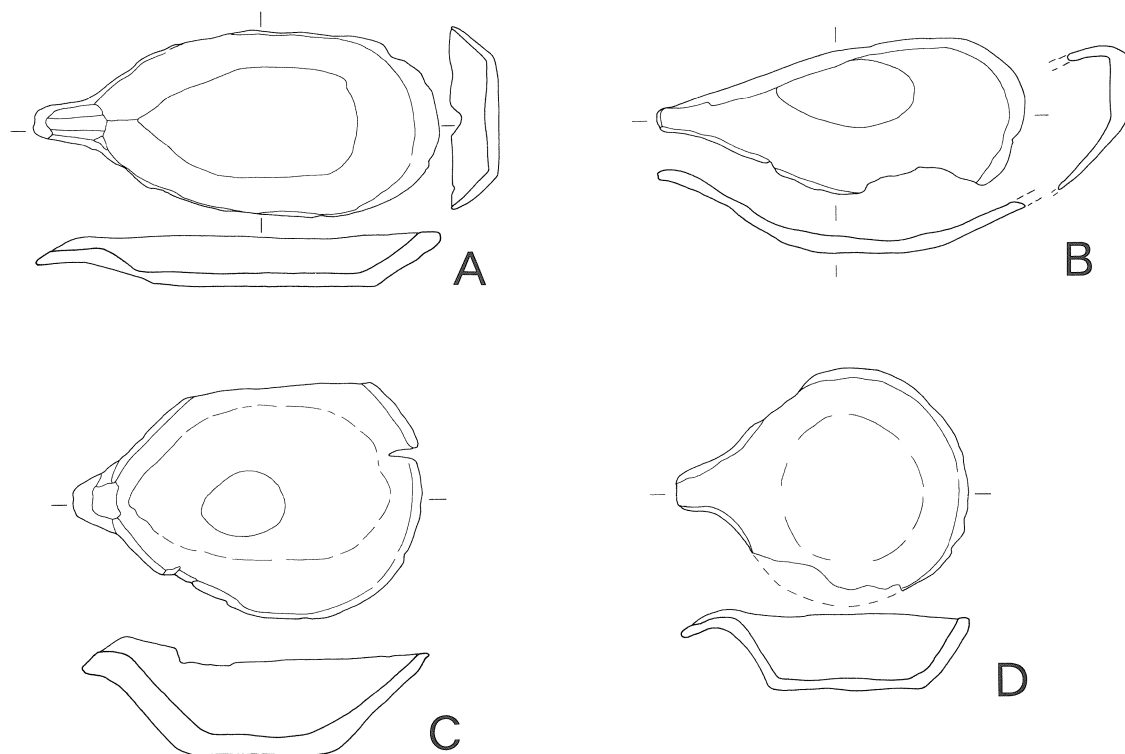
形態分類

木製片口（以下、片口とする。）は、注口部の存在から液体状の内容物を入れた容器と考えられる（註2）。管見に触れることのできた片口は、5府県11遺跡31例を数える（第10表）（註3）。ここでは注口部を持つものを中心に集成したが、注口部が欠損していても平面形や諸属性（後部突起を有する等）から片口と判断したものも一部含まれる。後藤守一氏は、韮山町山木、静岡市登呂両遺跡出土の片口を比較し、注口部の形態に若干の形態差が認められることを指摘している（日本考古学協会：1954）。

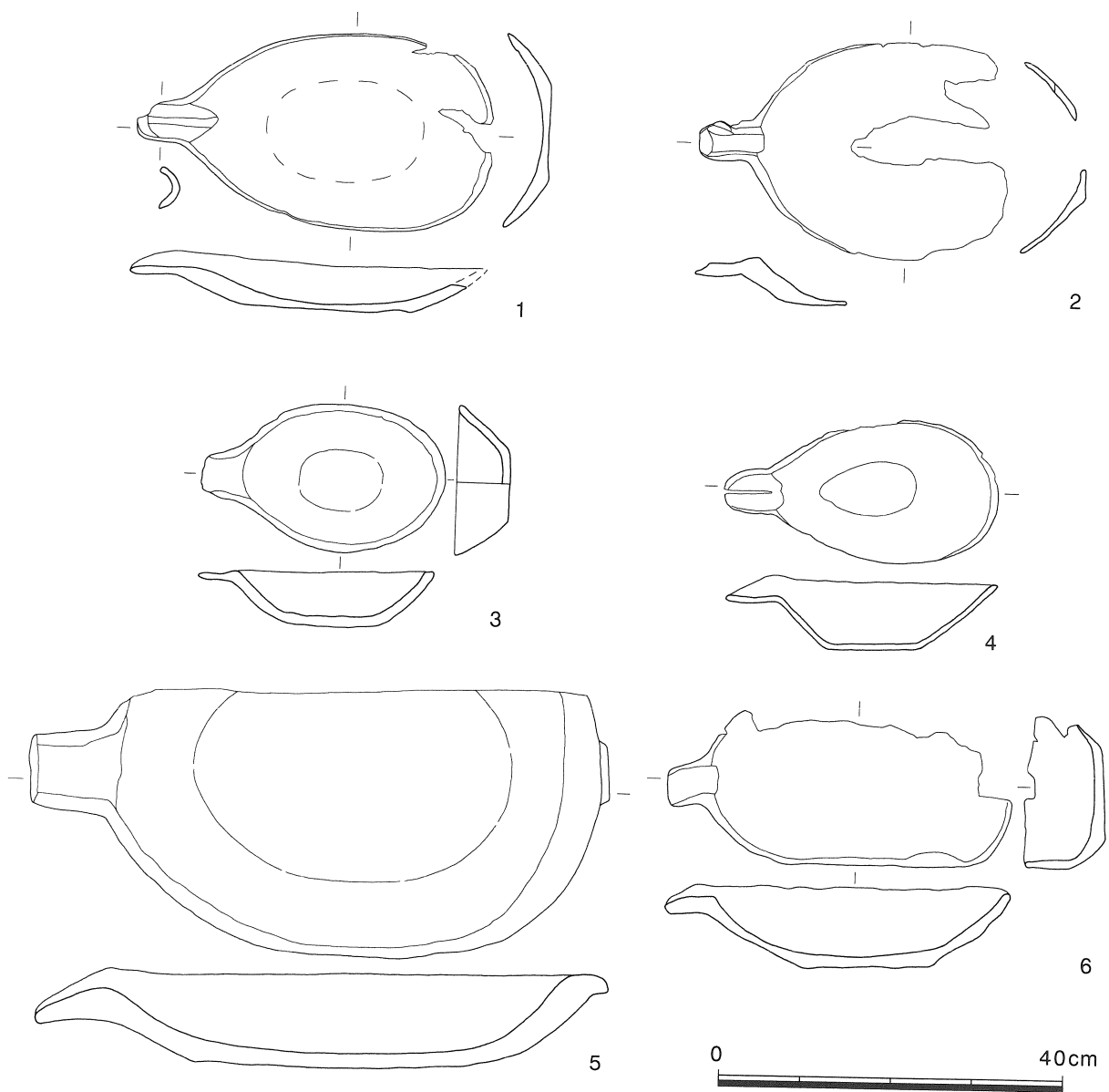
No.	所在地	遺跡名	遺構	時代	型式	全長	最大幅	器高	備考
92-1	静岡県三島市	御殿川流域遺跡群	流路	弥生後期～古墳前期	A	410	226	52	本報告
92-2	静岡県三島市	御殿川流域遺跡群	流路	弥生後期～古墳前期	A	-	252	74	内面赤彩
92-3	静岡県韮山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	283	170	64	
92-4	静岡県韮山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	317	165	77	Bに類似
92-5	静岡県韮山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	670	-	110	後部突起
92-6	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初頭	A	480	-	92	
93-1	静岡県韮山町	山木遺跡	流路		A	-	-	89	
93-2	静岡県韮山町	山木遺跡		弥生後期～古墳前期	A	500	-	84	
93-3	静岡県韮山町	山木遺跡		弥生後期～古墳前期	A	893	-	112	内面赤彩、円柱状脚
94-1	静岡県沼津市	雌鹿塚遺跡	包含層	弥生後期	C	-	-	42	小型
94-2	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初頭	A	214	98	46	
94-3	静岡県藤枝市	宮塚遺跡	包含層	古墳前期	A	390	-	66	
94-4	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初頭	B	324	50	-	
94-5	静岡県清水市	長崎遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	B	295	124	56	
94-6	静岡県藤枝市	宮塚遺跡	包含層	古墳前期	B	362	-	60	後部突起
94-7	静岡県静岡市	川合遺跡	流路		-	234	150	28	小型品
94-8	静岡県沼津市	雌鹿塚遺跡	包含層	弥生後期	A	-	-	-	後部突起
94-9	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初頭	A	712	324	90	
94-10	静岡県韮山町	山木遺跡	流路	弥生後期～古墳前期	A	-	-	-	
94-11	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初頭	C	-	-	-	
94-12	静岡県韮山町	山木遺跡			A	932	486	142	完形
95-1	静岡県清水市	長崎遺跡	畦畔	弥生後期	C	-	-	-	
95-2	静岡県静岡市	川合遺跡	溝	弥生中期～古墳初頭	C	-	-	-	
95-3	静岡県沼津市	雌鹿塚遺跡	包含層	弥生後期	C	-	-	-	
95-4	静岡県沼津市	雌鹿塚遺跡	包含層	弥生後期	C	386	-	74	
95-5	静岡県沼津市	雌鹿塚遺跡	包含層	弥生後期	C	368	-	130	
95-6	静岡県三島市	御殿川流域遺跡群	流路	弥生後期～古墳前期	C	-	-	-	
95-7	静岡県静岡市	登呂遺跡			D	233	174	56	
95-8	千葉県茂原市	国府関遺跡		古墳前期	A	470	245	78	後部突起
95-9	奈良県橿原市	大福遺跡	溝	弥生後期	A	513	-	120	
95-10	大阪府八尾市	久宝寺遺跡	溝		A	390	278	84	
95-11	滋賀県新旭町	針江川北遺跡	落ち込み	古墳前期	B	613	334	100	

第10表 木製片口集成表

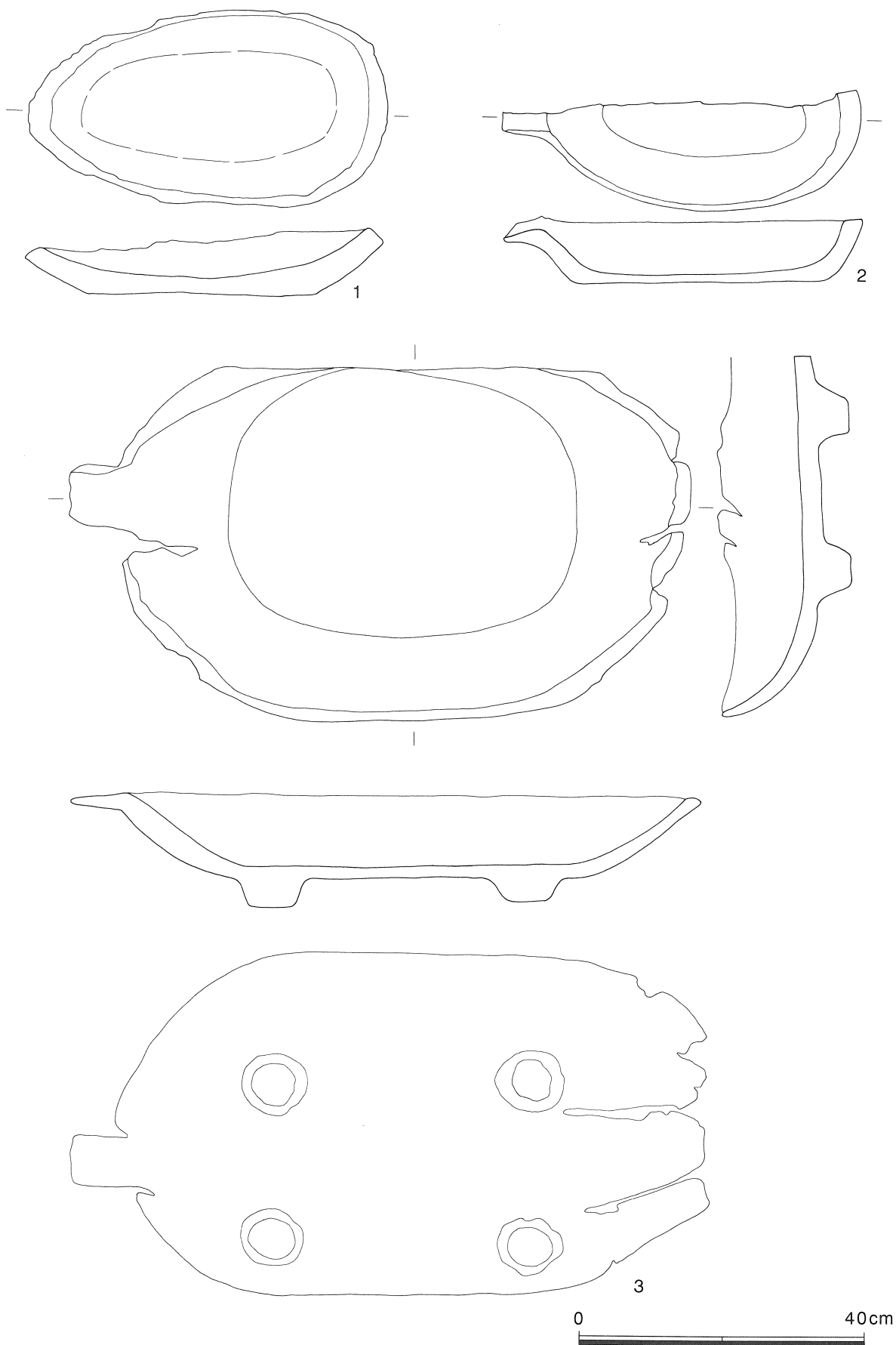
また、静岡県内の資料が大多数を占めていることから、地域の特徴として注目されたことがあるが(奈文研：1993、樋上：1996)、類例が乏しいこともあって形態分類にはいたっていない。先学の指摘や今回集成した結果から、平面形態をもとにA類・長円形を呈する大型のもの、B類・細長い水滴形を呈する小型のもの、C類・丸みを帯びた水滴形を呈するもの、D類・ほぼ円形を呈するものに大別され(第91図)、A類は、さらに、注口が滑らかに体部につながるものと注口が明確にくびれ突出気味となるものに細別可能で、後者は、静岡県東部に顕著である。その他の属性として、後部突起を付すもの、円柱状の短脚を持つものなどが認められるが、類例に乏しいことから、これは分類の基準とはせず補足的に扱うこととする。



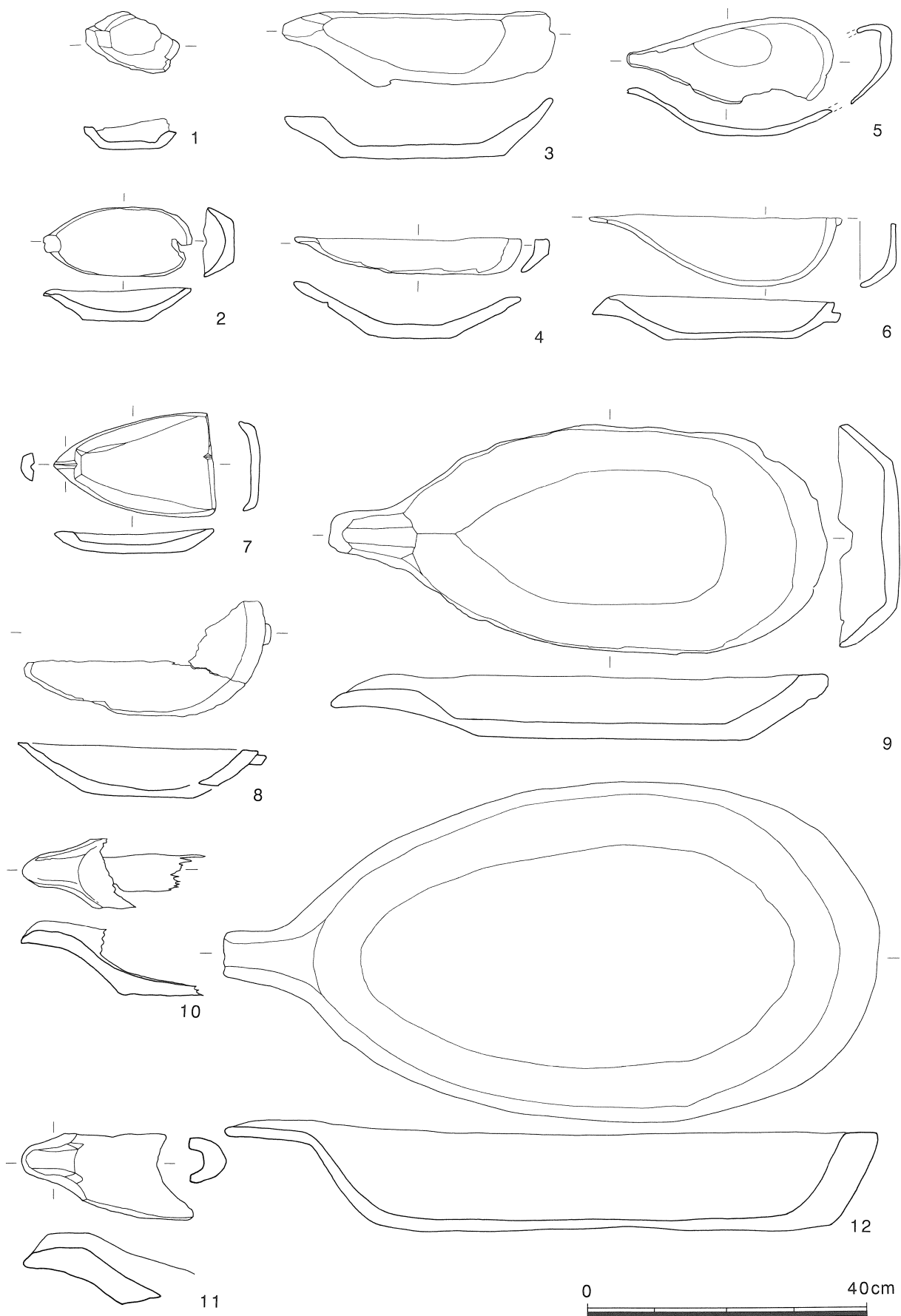
第91図 片口の形態分類図



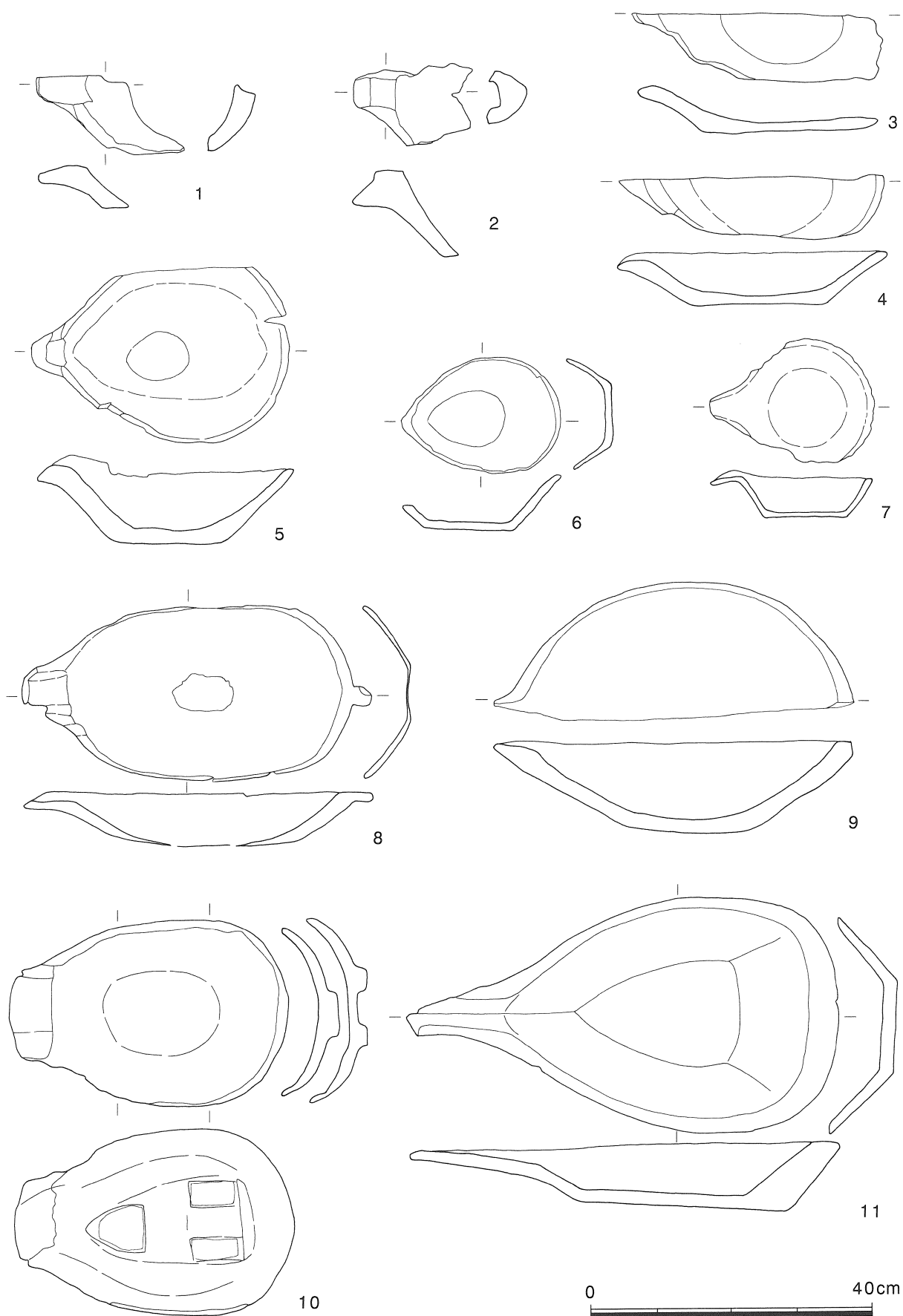
第92図 片口の実測図集成



第93図 片口の実測図集成



第94図 片口の実測図集成



第95図 片口の実測図集成

時期

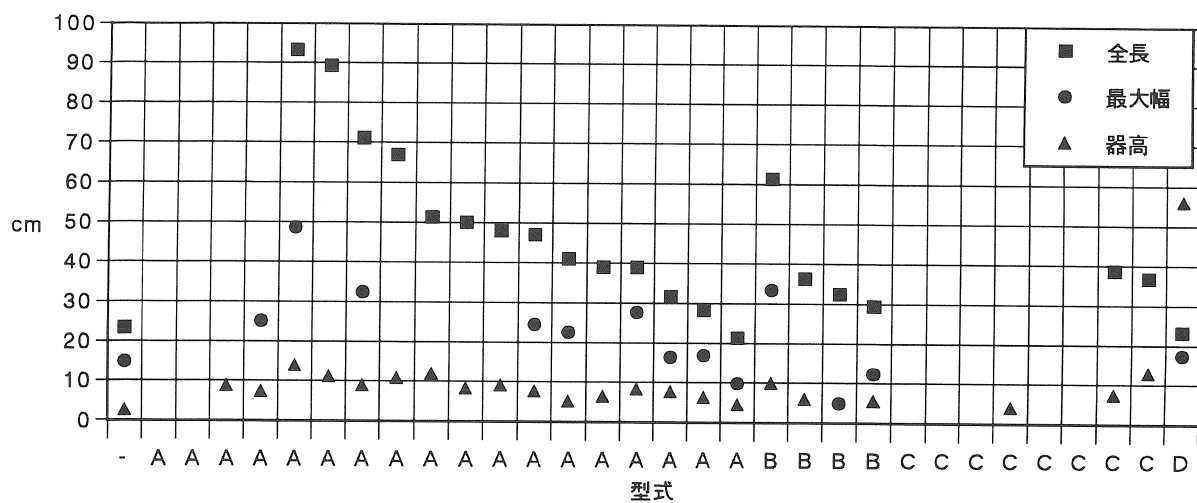
前述したように、片口は、遺物の材質上出土が低湿地に限られ、必然的に他遺物との共伴関係が不明瞭な出土状況を示すものが圧倒的に多い。したがって、時期決定は、やや曖昧なものとならざるを得ないが、弥生後期から古墳前期のものが大半を占めることから、ほぼ当該期に盛行する特徴的な遺物と考えられる（註4）。

分布

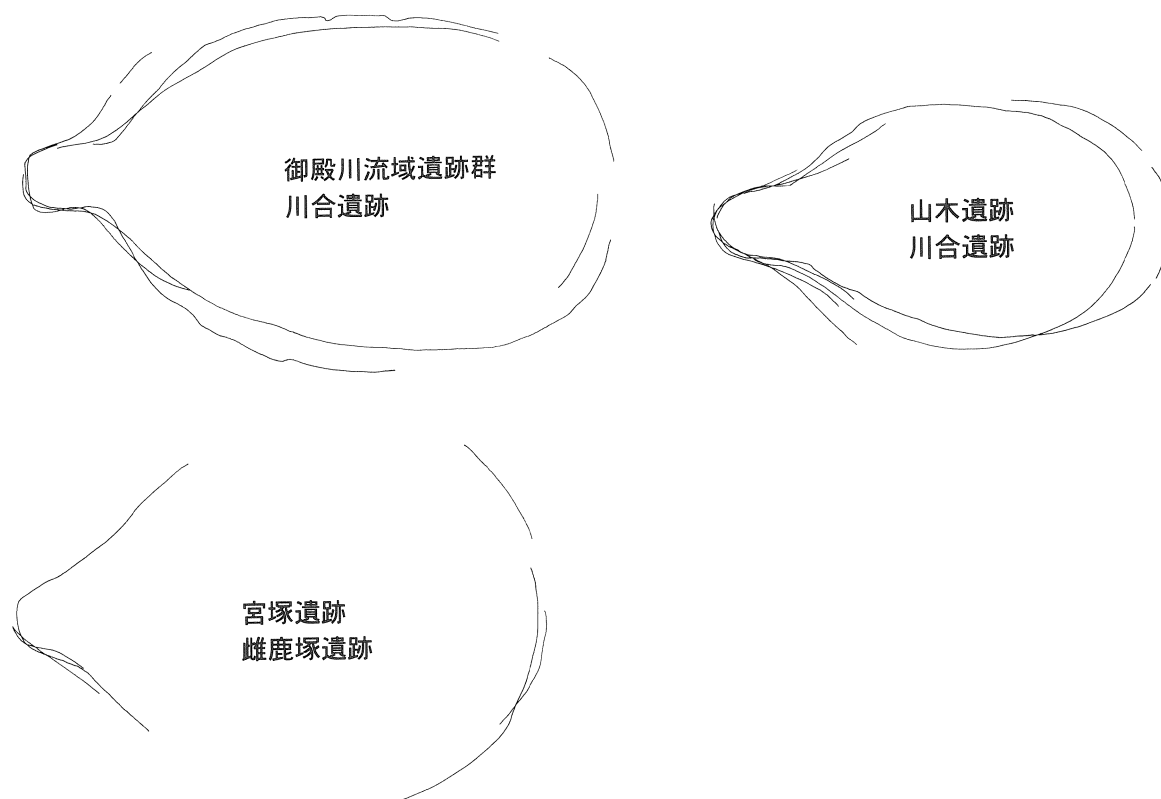
片口の分布は、静岡県内では大井川以東すなわち駿河・伊豆に分布が集中している（第96図）。調査例の地域的多寡も加味しなければならないが、この地域は、弥生後期に登呂・飯田式（中嶋：1991）と呼ばれる土器様式圏に該当しており、地域的特質を反映した分布を示している。登呂・飯田式は、基本的に「高坏形土器」を欠く土器様式であり、木製品がこれを補完していたとの意見もあり（註5）、壺、甕以外の機能形態がどのように補完されていたかが興味深いところである。現在のところ静岡～志太平野ではA類～D類が認められている一方、田方平野ではB類、D類は認められていない。また、A類のうち、注口部が明確にくびれるものは田方平野に卓越する傾向が認められる。



第96図 片口の分布



第11表 片口の法量比較 (1)



第97図 片口の法量比較 (2)

片口の大半が出土している駿河に隣接する東遠江及び関東地方では、片口形（鉢形）土器が存在する。形態は異なるものの、両地域は、巨視的に見た場合、片口を共通項として、特徴的な遺物を共有した地域とすることができる。駿河、東遠江は、天竜川以西の地域とは明確に区別される変換点として理解されているが、材質の違いこそあれ、機能を等しくする遺物の共有もまた、様式圏の特徴としてとらえられよう。

法量の比較

第11表及び第97図は、型式別の法量を比較したものである。現状では完形品が少なく、計測値だけでは比較が困難なことから、遺物の平面形態（一部推定も含む）も輪郭を重ね合わせて比較することとした。これによれば各型式は、一定の規格をもって製作されていたことが容易に推測できる。特に注目すべき点は、同一遺跡出土のものが同一規格を思わせることである。Aは、全長30～40cmの中型品から全長90cmを越えるような大型品まで、B・Cは、30～40cm程度の中型品を中心とするようである。Dは、登呂遺跡例の1例だけであるが、平面形が円形ということもあり全長は、20cm強というやや小型の部類に入る。

片口の製作が片口の未製品と報告されている浜松市角江遺跡出土の縦に連接した未製品のような製作方法を採用したと仮定すれば（研究所：1995b）、形態、規格に共通性を見いだすことも可能であり、型式の分布差がそのまま片口の流通範囲を示すことも考えられる。

弥生時代における木製品の生産体制については、製品と共に未製品を出土する遺跡と未製品を出土しない遺跡の二者が存在する事例をもとに、遺跡間において需給体制が整備されていたことを想定する研究がなされている。静岡県内では、低湿地集落遺跡の調査例が稀少で、仔細な検討は目下のところ困難であるが、今回の片口の集成、形態比較からみても、当時の木製品の生産が単純な自給自足にとどまらず、一定以上の規模、体制の下で行われていたであろうことは想像に難くない。

まとめ

低湿地の調査例の増加に伴い、多くの木製品資料が蓄積されつつある。このような現状では、土器だけでなく木製容器も生活食器類の組成のひとつに含めた議論も活発化している。木製容器の組成比率の問題は今後の課題であるが、駿河において片口がその一端を担っていたことは想像に難くない。

先学の指摘の通り、木製片口は、駿河を中心に分布することが追認できた。本稿では、近年の調査例も含めて資料集成を行い、平面形態をもとに形態分類とその分布（地域性）、変遷、意義について検討を行った。その結果、形態変化については判然としないものの、駿河の東部と西部とでは注口部の形態に若干の相違点を認めることができた。また、短絡的ながら、駿河、東遠江は、材質の違いこそあれ、片口を組成する分布圏であり、ここに地域的特性を見出した。本稿では木製容器のうち片口のみをとりあげたが、この他にも高坏、盤、槽など未検討の器種があることは言うまでもない。今後、これらを含めた研究が急務となるであろう。